

イロカノ語の時間表現の文法*

山本 恭裕

京都大学／日本学術振興会

キーワード：イロカノ語，時間意味論，時制，アスペクト，ムード

1. はじめに

本研究はイロカノ語を対象とし，この言語で時間的概念がどのように表現されるかを明らかにすることを目的とする．表現される時間的概念の種類に応じて，イロカノ語の言語資源は副詞的要素と動詞的範疇に分類できる．副詞的要素として機能するのは，従属接続詞，接語・不変化詞，副詞，前置詞，名詞，動詞という形式的クラスで，これらの要素は機能的には4つのクラスに分類される．また，イロカノ語では動詞的範疇によりアスペクトが表現されることを論じ，その上で文法範疇としての時制やムードを持たないことを議論する．

次のセクションでは，イロカノ語の文法を概観し，この言語の時間表現に関する先行研究の問題点を整理する．§3で本研究の分析が依拠する枠組みを導入し，研究方法についても述べる．§4で副詞的要素による時間表現を整理する．§5では，動詞的範疇による時間指示を記述・分析し，時制，アスペクト，ムードに関して，この言語の文法範疇としてどれを認定できるか議論する．§6で本研究を結論づける．

2. イロカノ語

2.1 文法概要

イロカノ語はオーストロネシア語族マラヨ・ポリネシア語派に属する言語である (Blust 2013)．コルディリエラ語群のメンバーと考えられており，グループ内において単独でブランチを形成する (Reid 1989)．話者数はおよそ 9 百万人おり (Rubino 2005)，主にフィリピン共和国のルソン島北西部で話されていることに加えて，ルソ

* 本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金 #17J08516 代表：山本恭裕)，#15H03206 (代表：松本曜) からの助成を受けている．

ン島北部地域で共通語としても機能している。また主な移住先であるアメリカ合衆国のカリフォルニア州やハワイ州などにも話者が多く存在する。

イロカノ語には 2 つの変種が一般に認知されており、/e/ の実現などの点で違いがある。この音素は南部方言で [w] として実現する一方、北部方言では [e] で実現する。

イロカノ語の音素体系は類型論的に小さいサイズであり (cf. Maddieson 1984), 母音として /a, e, i, u/, 子音として /p, b, t, d, k, g, ʔ¹, s, m, n, ŋ, r, l, j, w/ を持つ²。母音 /u/ は最終音節では基本的に [o] で実現する。有声性で対立する /d/ は歯茎で調音される一方 /t/ は歯茎音でなく歯音で実現する。強勢は音節の重さに敏感であり、次末音節が長母音を含む場合その音節に強勢が落ちる。それ以外の場合最終音節に強勢が落ちる (Yamamoto 2017)。

形態論は分析的、膠着的であり従属部型表示である。人称代名詞には数 (number) が関わらず、minimal-augmented の体系を持つ (Thomas 1955)。基本語順は述語が先行する VS/VAP である。格配列は人称代名詞が能格-絶対格型であり、固有名詞及び普通名詞は中立型で標示される。

イロカノ語の動詞は動詞形成接辞により派生され、その接辞の種類によりまず活動動詞 (active verbs) と状態動詞 (state verbs) に分けられる。活動動詞を派生する接辞は同時にヴォイス範疇を示し、ヴォイスは形態統語的に行為者ヴォイス (actor voice: AV), 被行為者ヴォイス (patient voice: PV), 場所ヴォイス (locative voice: LV), 移動物ヴォイス (conveyance voice: CV) の 4 つに分類される。行為者ヴォイスを示す接辞として *-um-*, *ag-* などが存在する。また被行為者ヴォイスを示す接辞として *-en* が、場所ヴォイスを示す接辞として *-an* が、移動物ヴォイスを示す接辞として *i-* が存在する。語根によりどの接辞と結びつくかが語彙的に決まっており、ある語根が全てのヴォイス範疇を表現できるわけではない。ヴォイス範疇に応じてどの意味役割の名詞句が絶対格で標示されるかが決定する。行為者ヴォイスの動詞は統語的に自動詞で、行為者名詞句が唯一の項として表現される。他の 3 つは非行為者ヴォイスとしてまとめられ、非行為者ヴォイスの接辞は 2 つの項をとる他動詞を派生

¹ 声門閉鎖音が音素的かどうかは環境に依存する。語頭及び母音間に現れるものは挿入されたものであり、一方子音と母音の間に生起するものは音素として認められる (Yamamoto 2017)。

² 母音長は語彙的に指定されるが、分節音とは独立した層において表示されると想定する。したがって音素体系に母音の長短は含まれない。

する。なお、ヴォイスの間には派生・非派生の関係は想定されず、その意味で対称的ヴォイスと特徴付けられる (詳しくは Himmelmann 2005: 112-114; Haude and Zúñiga 2016: 453-458 などを参照)。また、動詞屈折により根源的様相や認識的様相も表現される³。

先行研究ではこれらに加えて、イロカノ語の動詞的カテゴリーには時制／アスペクトが含まれると記述されている (Rubino 1997; 2005)。2.2 では、これらの先行研究を概観し、問題点を整理する。

2.2 先行研究

Rubino は、イロカノ語において動詞の屈折により 5 つの時制／アスペクトが表現され、以下の表 1 のようなパラダイムをなすと記述している⁴ (1997: 276)。perfective は *n-/-imm-/-in-* などの接辞によって表現され、語幹のヴォイス接辞によってどの接辞が出現するかが決まる。imperfective は語根初頭の CVC の重複⁵により表されると記述されている。また、past imperfective は perfective 形の動詞の CVC 重複によって、future は接語の *=(n)to* で表現されるとしている。なお *=to* は母音の直後では *=nto* で現れる。

Rubino は infinitive, perfective, imperfective の 3 つのアスペクトに、それぞれ次のような意味的特徴を与えている (1997: 276): infinitive は “the action of the verb is not specified as to whether it has been initiated or completed” という状況を表現し、perfective は “the action of the verb has been initiated and completed” という状況を表現する。また imperfective が表現するのは “for non-punctual actions ... the action of the verb has been initiated, but is still in progress” という状況と記述している。また時制について、future が “the action of the verb has yet to be initiated” という状況を、past

³ 動詞的範疇により表現される根源的モダリティと認識的モダリティは、それぞれ能力と可能性と特徴付けられる。この形態的操作は生産性が高く、従って屈折的であるが、同時に終結性 (telicity) などの点で語彙的な意味変化を伴うため、その点で派生的な性質も持つ (cf. Luraghi 2014)。

⁴ Rubino (2005) の記述は Rubino (1997) と異なり、past imperfective という範疇を含んでいない。また、使用されている用語が異なり、imperfective は progressive, perfective は perfective/complete となっている。しかしながら、これらの意味的な特徴については触れられていないため、Rubino (1997) と記述内容がどこまで異なるのかは明らかでない。

⁵ 語幹が基底において頭子音を持たない場合、重複のターゲットは VC となる。従って本稿では (C)VC と記述する。また母音の長さは重複のターゲットには含まれない。この事実は母音の長さを独立の層で表示することを支持する (注 2 を参照のこと)。

imperfective は “a continuous action is framed relative to a past time” という状況を表すとしている。

表 1 Rubino (1997: 276) のイロカノ語の時間表現に関わる動詞形態法

Infinitive (neutral)	Perfective	Imperfective (incomplete)	Past imperfective	future
ʔag-a:dal (AV-study)	n-ag-a:dal	ʔag-ad~ʔa:dal	n-ag-ad~ʔa:dal	ʔag-a:dal=to
t<um> araj (<AV>run)	t<imm>araj	t<um>ar~taraj	t<imm>ar~taraj	t<um>araj=to
ʔi-lu:to (CV-cook)	ʔ<in>lu:to	ʔi-lut~lu:to	ʔ<in>lut~lu:to	ʔi-lu:to=nto
gataŋ-en ⁶ (buy-PV)	g<in>ataŋ-ø	gat~gataŋ-en	g<in>at~gataŋ-ø	gataŋ-en=to
punas-an (wipe-LV)	p<in>unas-an	pun~punas-an	p<in>un~punas-an	punas-an=to

この記述に対して、複数の問題を指摘できる。1つ目は定義の厳密さの問題であり、行為 (action) を開始している／いない、完了している／いないという判断がどの時点を基準にして判断されるものなのかが明示されておらず、かつ5つの範疇が同一の時点を基準とするのか否かも不明である。2つ目は、意味論的議論の欠如である。時制やアスペクトの解釈を客観的に示すには、文脈を提示した上で議論することが有効であるが (Dahl 1985; Matthewson 2004; Cover and Tonhauser 2015), 文脈情報は一切示されておらず、仮定された意味的特徴を肯定するデータも否定するデータも提示されていない。3つ目の問題は、提案されている時制体系の非対称性である。Rubino の分析では、アスペクトは範列的である一方、以下の表2のように、時制のパラダイムに多くのギャップが生まれる。接語 =(n)to は infinitive aspect と共起し未来時制を表現すると記述されるが⁷, このアスペクト形式において過去や現在では範列的に表現されないという記述になっている。さらに、imperfective においては

⁶ perfective 形および past imperfective 形の被行為者ヴォイスはゼロにより示される。

⁷ 後述するように、この前接語が共起するのは infinitive aspect に限定されない。また Rubino はこの接語を動詞の形態論に含めているが、これは次の2点で問題がある。第一に、強勢の分布から、接語はイロカノ語において (音韻的) 語と認定できるため、他の語の形態論には含まれない。第二に、接語を接辞から区別するための定義上、接語は特定の統語的範疇のみ先行・後続する訳ではない。これらの根拠から、本稿では =(n)to を動詞の形態論には含めない。

過去時制が表現されるが、現在および未来時制は形式的に区別されないという記述になっている。加えて perfective では、時制に関わる屈折は含まれない。本研究では複数の形式が1つの概念ドメイン内でパラダイムを形成するか否かを、その概念が文法範疇として認定されるかどうかの基準とする。従って、イロカノ語が時制を文法範疇として持つというためには、これらを含め何らかの形式のセットが時制というドメインにおいて範列的關係になければならない。§4 ではこの点も議論する。

表2 Rubino (1997) の分析における時制のギャップ

Tense	Past	Present	Future
Aspect			
Infinitive	NA	NA	✓
Perfective	NA	NA	NA
Imperfective	✓	NA	NA

まとめると、先行研究は定義、データの提示方法、記述の不自然さという3つの点において問題を持つ。次のセクションでは、本研究で用いる時間意味論のモデルおよびデータの収集方法を導入する。

3. 枠組み

3.1 時間の意味論

本研究が基づく時間意味論のモデルでは、次の3つの変数を同定することにより、言語表現による時間指示の解釈が行われると想定する (Klein 1994; Bohnemeyer 2014):

- situation time $\tau(e)$: 発話により描写される出来事 (eventuality)⁸ の時間
- utterance time t_{uc} : 発話が行われる時間あるいは発話が解釈される時間⁹

⁸ 本研究では出来事 (eventuality) という用語を、事象 (event) と状態 (state) の両方をカバーするものとして使用する。

⁹ この2つの時間概念は、書き言葉によるやりとりにおいてより明確な区別が必要になる。

- topic time t_{top} ¹⁰: 発話された命題が問題とする時間. この時間について命題の真偽が主張されたり(叙述 (assertion) の発話内行為), 問われたり(疑問 (question) の発話内行為) する.

伝統的に, 時制 (absolute tense) は $\tau(e)$ と t_{uc} の関係性から規定されてきたが (Comrie 1985), Klein (1994) では $\tau(e)$ と t_{top} の関係を限定する関数と定義される (詳しくは後述). 一方, 伝統的なアスペクト (view point aspect) の定義は時間的關係から規定されるのではなく, 出来事を1つのまとまりとして表現するか (perfective aspect), 出来事の内部の時間的構成について言及するか (imperfective aspect) という, 出来事に対する見方の違いと定義されてきた (Comrie 1976: 3). しかしこのような定義は直観的なものであり, 見方という比喩が用いられているため明示性にかけるという問題がある. また, そのほかのアスペクトの特徴づけとして, 出来事の始点と終点の境界を含むか (perfective aspect), そのどちらも含まないか (imperfective aspect) という区別が用いられることもある (Smith 1997). しかし, 事象の終点という概念が, ある語に本来的に備わる終結性 (telicity) と重なり, それらがどのように区別されるのかが不透明という問題点がある. また, この様な定義が当てはまらないロシア語のデータも提示されている (Klein 1995: 677). 本研究で採用する Klein (1994) では, アスペクトを, 時制と同様に時間的変数の関係性から捉え $\tau(e)$ と t_{top} の関係を限定する関数と定義する. これらの妥当性を理解するために, 次のような裁判官の質問 (1a) と証人の陳述 (1b-g) の例があげられる (Klein 1994: 39-40).

(1) [Context: investigator eliciting witness testimony]

- a. What did you notice when you entered the room?
- b. A man was lying on the floor.
- c. He was Chinese or Japanese.
- d. He did not move.

本稿では書き言葉を扱わないため, この可能性については考えず2つの時間は一致していると想定して議論を行う.

¹⁰ t_{top} は, 同様に3つの変数を用いる Reichenbach (1947) の参照時 (the point of reference) と類似する概念である. これら2つが一致する場合もあるが, 参照時は基本的に談話上のすでに言及された他の出来事の時間とされており (1974: 288), t_{top} とは異なる概念である. Bohnemeyer (2014) はこれらが異なる概念であるとした上で, 時間表現の記述には両方が必要と主張している.

- e. A woman was bending over him.
- f. She was taking a purse from his pocket.
- g. She turned to me.

1b-g の証人の陳述はそれぞれ異なる出来事を表現している。これらは全て 1a の裁判官の質問に答えるものであり、この質問によって導入される t_{top} (証人が部屋に入った時間) において証人が見た出来事であると言明されている。

1d, g では動詞が単純過去形であり、これらの節が表現する出来事の時間 $\tau(e)$ が t_{top} に含まれる perfective aspect の解釈が得られる。かつ、 t_{top} は t_{uc} に先行する過去時制と解釈される。1b, e, f では動詞が進行形をとり、それらが描写する出来事は証人が部屋に入ったときすでに開始されていて、その後も展開した (つまり $\tau(e)$ が t_{top} を含む) という imperfective aspect の解釈と t_{top} が t_{uc} に先行する過去時制の解釈がなされる。ここまでのことから、英語の単純形の動詞は $\tau(e)$ が t_{top} に含まれる ($\tau(e) \subseteq t_{top}$ ¹¹) ときに使用され、進行形は t_{top} が $\tau(e)$ に含まれる ($t_{top} \subset \tau(e)$) ときに使用される。また、過去形は t_{top} が t_{uc} に先行する ($t_{top} < t_{uc}$) ときに使用されると纏められる。

ここで、伝統的に時制を特徴づけると考えられてきた $\tau(e)$ と t_{uc} の関係を考える。1b-g の例は、それらが描写する出来事の $\tau(e)$ と t_{uc} の関係性について何も明示しておらず、裁判の最中においてこれらの出来事が成立するか、あるいはしないかは不明である。しかし例えば日常的な知識から、1b, d, e, f, g が表す出来事の $\tau(e)$ は t_{uc} に先行すると推論できることに基づき (裁判時にこれらの出来事は終わっているように思われる)、過去時制は $\tau(e) < t_{uc}$ を表す、と言えるかもしれない。しかしこのような推論に基づくのであれば、1c が表す出来事は裁判時においても真である (つまり $t_{uc} \subset \tau(e)$) と推論するのが自然と思われ、ここで過去時制が使用されている理由を説明できない。こうしたことから、時制に $\tau(e)$ と t_{uc} の関係は関わらない

¹¹ 真部分関係 (proper parthood) ‘ \subset ’及び部分関係 (parthood) ‘ \subseteq ’ など、部分構造 P に含まれる要素は次のように定義される (Krifka 1998; Varzi 2016 など参照のこと):

- a. U_P is a set of entities;
- b. \oplus_P , the sum operation, is a function from $U_P \times U_P$ to U_P that is idempotent, commutative, associative, that is: $\forall x, y, z \in U_P [x \oplus_P x = x \wedge x \oplus_P y = y \oplus_P x \wedge x \oplus_P (y \oplus_P z) = (x \oplus_P y) \oplus_P z]$;
- c. \subseteq_P : $\forall x, y \in U_P [x \subseteq_P y \leftrightarrow x \oplus_P y = y]$;
- d. \subset_P : $\forall x, y \in U_P [x \subset_P y \leftrightarrow x \subseteq_P y \wedge x \neq y]$

なお本文では、 \subseteq_P , \subset_P を省略して \subseteq , \subset と表記する。

とするのが妥当であると言える。

まとめると、文法範疇としての時制及びアスペクトは次のように定義される：時制は、文法的なパラダイムを形成する、 t_{uc} に対する t_{top} の位置を限定する表現である；アスペクトは、文法的パラダイムを形成する、 t_{top} と $\tau(e)$ の関係性を限定する表現である。

表 3 はこれらの枠組みにより英語の時制とアスペクトの体系がどう表現されるかを示している。表 1 から、時制とアスペクトは独立しているが、英語では両方が 1 つの形式に合成されて表現されることがあることがわかる。Klein (1994) の枠組みの強みは、少数かつ同一の意味的変数のセットにより時制とアスペクトの両方を記述できることである。

表 3 Klein (1994)による英語の時制とアスペクトの分析

Tense	Past	Present	Future
Aspect	$t_{top} < t_{uc}$	$t_{uc} \subset t_{top}$	$t_{uc} < t_{top}$
Perfective $\tau(e) \subseteq t_{top}$	Simple Past <i>I wrote</i>	Present <i>I write</i>	Simple Future <i>I will write</i>
Imperfective $t_{top} \subset \tau(e)$	Past Progressive <i>I was writing</i>	Present Progressive <i>I am writing</i>	Future Progressive <i>I will be writing</i>
Perfect $\tau(e) < t_{top}$	Pluperfect <i>I had written</i>	Present Perfect <i>I have written</i>	Future Perfect <i>I will have written</i>
Prospective $t_{top} < \tau(e)$	Past Prospective <i>I was going to write</i>	Present Prospective <i>I am going to write</i>	Future Prospective <i>I will be going to write</i>

3.2 データ

本研究で使用するデータは、2016 年から 2017 年の期間に、フィリピン共和国イロコス・ノルテ州ラワグ市において筆者が収集した一次データである。アスペクトと時制の意味を議論する場合、(a) t_{uc} や $\tau(e)$ に対する t_{top} の関係性を限定する副詞的要素 (§4) か (b) t_{uc} や $\tau(e)$ に対する t_{top} の関係性を限定するような文脈情報のどちらかを含むデータを使用する。時間表現に関わる動詞的範疇の意味は、a あるいは b が表す時間情報との整合性により特定される(例えばある形式が t_{top} が t_{uc} に後続する文脈で出現した場合非整合的であり、 t_{top} が t_{uc} に先行する時にのみ整合的であるならば、過去時制と同定される)。

聞き取り調査において用意した文脈情報には Dahl (1985) の質問票も利用した。

調査協力者はイロコス・ノルテ州で育ち、現在も住んでいる話者である。文法性・意味的整合性の判断は、少なくとも4名の話者（20歳から40歳；男性3名，女性1名）に仰いだ。

4 副詞的要素による時間表現

副詞的要素は話題の時間 t_{top} を特定するための参照時を導入したり、出来事の継続時間を表現したりするためなどに使用される。表4にリストしたのは時間を表現する代表的な副詞的要素であり、形態的・機能的にいくつかのクラスに分類している¹²。形態的には副詞，従属接続詞，接語・不変化詞，前置詞，名詞，動詞に分類できる。機能的には大まかに，時間的位置 (time-positional) を表す要素，持続時間 (duration) を表す要素，頻度 (frequency) を表す要素，アスペクト的意味を表す要素の4つに分類できる。時間的位置を表す要素は t_{top} を決定する参照時を導入する機能を持つ。例えば，時間の順序関係を表現する副詞的要素であれば，それらを参照点としてその前後に t_{top} の位置が特定される。持続時間を表す要素は，出来事の時間 $\tau(e)$ の長さや，出来事の始点や終点の時間を特定する役割を果たす。3つ目の頻度を表す要素は，具体的には $\tau(e)$ の生起の頻度を特定する機能を持つ (Klein 1994: 143–214)。

表4 時間を表現する副詞的要素

Function	Semantic characteristic	Morphological class	Form	English gloss
Time-positional	deictic	subordinator	<i>(?intu:)no/</i>	when (after t_{uc})
			<i>(?in)ton</i>	
			<i>?idi</i>	
		adverb	<i>?itaj</i>	a while ago
			<i>tatta/ita</i>	now
			noun	<i>madamda:ma</i>
			<i>kalman</i>	yesterday

¹² 機能的クラスは完全に離散的なものではなく，ある要素は異なる文脈において異なる機能を担いうる。

Function	Semantic characteristic	Morphological class	Form	English gloss		
Time-positional		noun	<i>bigat</i>	tomorrow		
		enclitic	<i>=(n)to</i>	future time reference		
	solar-centric		noun	<i>bigat</i>	morning	
				<i>malem</i>	afternoon	
				<i>rabi?i</i>	night	
	temporal order		verb ¹³	<i>na-sa:pa</i>	early	
				preposition	<i>bajat</i>	while
					<i>sakbaj</i>	before
	temporal distance		adverb	<i>kalpasan</i>	after	
				<i>(?in)sigi:da</i>	immediately	
	temporal distance		conjunction	<i>dagus</i>		
				<i>tattan</i>	then	
				<i>sa</i> <i>ket</i>		
calendric		noun	<i>martes</i>	Tuesday		
			<i>hu:njo</i>	June		
			<i>paskwa</i>	Christmas		
Duration	relative duration	verb	<i>na-bajag</i>	for a long time		
			<i>?ag-daras</i>	quickly		
	solar-centric			<i>?ag-malem</i>	during the day	
				<i>?ag-patnag</i>	during the night	
	beginning of $\tau(e)$	preposition		<i>manipud</i>	since	

¹³ §2でも述べた様に、動詞は派生接辞により形成される。ここでは *na-* により派生されている。

Function	Semantic characteristic	Morphological class	Form	English gloss
Duration	end of $\tau(e)$	preposition	<i>aginga</i>	until
Frequency		adverb	?<in>aldaw <i>kana:jon</i>	every day always
		verb	<i>maminsan</i> <i>ma:min adu</i>	once many times
		noun	<i>daddu:ma</i>	sometimes
		enclitic	$=\text{(e)n}^{14}$	already
Aspectual		particle	<i>paj</i>	still

以下では、これらの時間表現のうちいくつかの形態統語的性質を概観する。まず、時間的位置を示す *?idi* や *?intu.no/?inton/no* は節を導入する従属接続詞であり、導入される節が表す出来事の時間 $\tau(e)$ が t_{uc} に先行する場合前者が、後続する場合後者が使用される。

- (2) na-ga ?ed ?isu:na *djaj* *solso:na* ?idi ?ubiŋ \emptyset .
 ST-live 3MINI.ABS DIST.OBL P when child 3MINI.ABS
 ‘S/he lived in Solsona when s/he was child.’
- (3) *tawag-an=nak* ?inton ?<um>aj=ka *ditoj*.
 call-NEU.LV=2MINI.ERG.1MINI.ABS when <NEU.AV>come=2MINI.ABS PROX.OBL
 ‘Call me when you come here.’

これらの接続詞は時間的位置の名詞を導入する際にも使用される。その場合も *?idi* や *?intu.no/?inton/no* は、名詞の指示対象が位置する時間が t_{uc} に先行するか後続す

¹⁴ この接語は最終音節が閉音節の語幹に前接するとき $=en$ で実現し、最終音節が開音節の語幹に前接するとき $=n$ で実現する。また、人称代名詞 $=ak$ ‘1mini.abs’, $=k$ ‘1mini.erg’, $=m$ ‘2mini.erg’ に前接するとき、それぞれ $=ako=n$, $=ko=n$, $=mo=n$ となる。これらに現れる [o] は、マラヨ・ポリネシア祖語で再建される $=aku$, $=ku$, $=mu$ の母音が保持されたものと考えられる (Rubino 1997: 321; cf. Ross 2002).

るかで使い分けられる。

- (4) ma-pan=ak ʔidjaj sentro no bigat /sumarno ʔa lu:nes.
 NEU.AV-go=1MINI.ABS DIST.OBL center when morning next LIG monday
 ‘I will go to the town centre tomorrow morning/next Monday.’

- (5) t<imm>aguno ʔisu:na ti kasar ʔidi domiŋgo.
 <PFV.AV>attend 3MINI.ABS OBL wedding when sunday
 ‘I attended the wedding last Sunday.’

多くの副詞は、リガチャーにより動詞句や節と関係づけられる (6)。ただし、時間的位置を示す副詞の *ʔitaj* と *tatta/ʔita* の使用にはリガチャーは決して使用されない (7)–(8)。

- (6) s<in>ura:t-a=k ʔisu:na ŋa sigi:da.
 <PFV>write-LV=1MINI.ERG 3MINI.ABS LIG immediately
 ‘I wrote him a letter immediately.’

- (7) ʔita=k laʔeŋ ʔammo taj ʔagpajso.
 now=1MINI.ERG just know C fact
 ‘I just got to know the fact now.’

- (8) ma-pan=kami maŋ-an tatta ʔa rabiʔi.
 NEU.AV-go=1AUG.ABS NEU.AV-eat now LIG night
 ‘We will go eat tonight.’

動詞の時間表現もまた、多くの副詞と同様にリガチャーで他の節要素と関係づけられる。次の例では、出来事の持続時間を特定する動詞 *nabajag* ‘for a long time’ が副詞的要素として機能している。

- (9) na-bajag=kami ŋa nag-saʔo ʔidjaj kapete:rja
 for.a.long.time=1AUG.ABS LIG PFV:AV-talk DIST.OBL cafeteria
 ‘We talked at the cafeteria for a long time.’

表 4 にリストしたものに加え、リガチャーと名詞の組み合わせも持続時間の明示化に使用される。

- (10) nag-pa-danom djaj lakaj ?idjaj talta:lon ŋa majsa ?ŋa ?o:ras.
 PFV:AV-CAUS-water C old.man DIST.OBL rice.field LIG one LIG hour
 ‘The old man irrigated the fields for an hour.’

前接語の =(e)n ‘already’ と不変化詞 paj ‘still’ は文中のどこにでも出現する出現頻度の高い語であり、典型的には文初頭の語に後続する位置に出現する。これらの要素の意味については不明な点が多いが、本研究ではこれ以上扱わない。

- (11) nag-la?iŋ=ako=n djaj sakit=ko.
 PFV:AV-good=1MINI.ABS =already OBL sick=1MINI.GEN
 ‘I have already got better.’

- (12) na-sakit paj la?eŋ ti ?u:lo=k.
 ST-sick still just C head=1MINI.GEN
 ‘I still have a headache.’

5. 動詞的範疇による時間表現

このセクションでは、動詞の屈折による時間表現の意味を分析する。Rubino (1997) で挙げられた時間表現に関わる動詞の屈折を、本研究の枠組みにより順に検討していく。ここでの分析を踏まえて、イロカノ語の文法範疇としてアスペクトを認定できること、時制とムードは認定できないことを示す (表 5)。なお、動詞は形態的に活動動詞と状態動詞に分類されると前述したが、屈折をするのは活動動詞のみであるため状態動詞は分析から除外する。

表 5 時間指示に関わる屈折形態素と意味

Mood value	Irrealis	Neutral	
Aspectual value	Neutral	Perfective	Imperfective
Morpheme	∅	-imm-/-in-/n-	(C)VC-reduplication

5.1 IMPERFECTIVE¹⁵

この形式は、動詞語幹の(C)VC 重複により形成される。IMPERFECTIVE は t_{top} が $\tau(e)$ に真に含まれる時、つまり imperfective aspect を表現する時に使用される。

- (13) [Context: Has your brother finished the letter?] (No,)

ʔi-sur~su:rat=na palaŋ.

CV-IMPF~write=3MINI.ERG still

‘He is still writing the letter.’

- (14) [Context: What is your brother doing right now?]

ʔag-tug~tugaw ʔisu:na ʔidjaj tugaw ken ʔag-bas~ba:sa ʔiti libro

AV-IMPF~sit 3MINI.ABS DIST.OBL chair and AV-IMPF~read OBL book

‘He is sitting in a chair and reading a book.’

- (15) [Context: (Of a coughing child:) For how long has your son been coughing?]

ʔag-uj~ʔujek ʔisu:na ʔitaj pa laʔeŋ.

AV-IMPF~cough 3MINI.ABS a.while.ago still only

‘He has been coughing from a while ago.’

(13) の文脈では、 t_{uc} において手紙を書き終えたかが問われているため、 t_{uc} が t_{top} として導入されている。そして、(13) が描写している手紙を書くという出来事が占める時間 $\tau(e)$ は、 t_{top} ($=t_{uc}$) とその前後の隣接する時間であると解釈される。従って $t_{top} \subset \tau(e)$ を表現していると言える。次に、(14) の文脈において話題となっている時間 t_{top} も同じく t_{uc} である。(14) が表す出来事は、 t_{top} ($=t_{uc}$) 及びその前後の時間において成立すると解釈されるため、imperfective の定義 $t_{top} \subset \tau(e)$ が満たされる。(15) においては、 t_{uc} を基準に子供の咳の持続時間が問われているため、ここでも t_{top} が t_{top} と言える。(15) が描写するのは、子供の咳が t_{top} ($=t_u$) に先行する時間から始まり、 t_{top} ($=t_u$) においてもまだ持続しているということである。従ってここでも imperfective の定義 $t_{top} \subset \tau(e)$ が満たされる。次の (16) のように、IMPERFECTIVEが、出来事の時間 $\tau(e)$ が t_{top} に収まる文脈で使用されると、意味的に矛盾すると判断

¹⁵ 以下では、形式を指示する際はスモールキャピタルを使用する。例えば IMPERFECTIVE の場合、Rubino (1997; 2005) において imperfective aspect を表すとされる重複を含む形式を意味する。

される。

- (16) [Context: Has he read the book?]

#wen, bas~basa-en=na dajtoj libro¹⁶.
 yes IMPF~read-PV=3MINI.ERG PROX.C book
 ‘Yes, he is reading the book.’

Rubino (1997) の記述通り、時制を文法範疇として認めることが妥当であるならば、imperfectiveは過去／非過去の区別を含むはずである。つまり、過去の文脈 ($t_{top} < t_{uc}$) にはIMPERFECTIVEは使用できず、PAST IMPERFECTIVEのみが使用できるということになる。しかし、IMPERFECTIVEは(13)–(15)のような現在に加えて、過去と未来のいずれの文脈にも現れることができる。§4で記述したように、従属接続詞の?idiは、導入する節が描写する出来事の時間 $\tau(e)$ が t_{uc} に先行する時にのみ使用され、 t_{uc} に先行する時間に t_{top} を限定する。

- (17) $t_{top} < t_{uc}$ に限定する副詞との共起

?ag-saŋ~sa:ŋit ti ?ubiŋ ?idi s<imm>aŋpet ni ta:taŋ=na.
 AV-IMPF~cry C child when <PFV.AV>arrive P.C father=3MINI.GEN
 ‘The child was crying when his/her father came home.’

- (18) [Context: What your brother DO when we arrive, do you think? (=What activity will he be engaged in?)]

?ag-sur~su:rat Ø ti letters.
 AV-IMPF~write 3MINI.ABS OBL letter
 ‘He will be writing letters.’

ここまで見たデータより、IMPERFECTIVEは時制、つまり t_{top} と t_{uc} の関係性について何も限定せず、PAST IMPERFECTIVEと時制において範列的關係にない。IMPERFECTIVEはimperfective ($t_{top} \subset \tau(e)$)を意味する形式であると結論づける。

5.2 PERFECTIVE

PERFECTIVEは接辞 *-imm/-in/-n-* などによって形成される。ここでは、この形式がperfective、つまり $\tau(e)$ が t_{top} に含まれることを表現するときに使用されることを確

¹⁶ ハッチマーク (#) は、形式的には問題のない構造だが意図された文脈で使用できない、ということの意味するために用いる。

認する。

以下の例 (19) では、文脈の少年が帰宅した時間が参照時となり、その直後の位置に t_{top} が特定される。そして少年が父親にけられた時間 $\tau(e)$ は t_{top} である帰宅直後において生じたと解釈される。一方 (20) における t_{top} は、副詞節によって導入されている父親が帰宅した時間の直後である。(20) は子供が泣くという出来事を描写しており、この出来事の時間 $\tau(e)$ は t_{top} に含まれる。つまり、子供が泣いたのは父親が帰宅した時であり、父親の帰宅以前に泣いていたとは解釈されない。

(19) [Context: What the boy's father DO when the boy came home (yesterday)?]

k<in>ugtar-an=na Ø na:min ?adu¹⁷.
 <PFV>kick-LV=3MINI.ERG 3MINI.ABS time many
 'He kicked him several times.'

(20) 時間副詞節との共起

nag-sa:ŋit ti ?ubiŋ ?idi s<imm>aŋpet ni ta:taŋ=na (cf. 17)
 PFV:AV-cry C child when <PFV.AV>arrive P.C father=3MINI.ERG
 'The child cried when his/her father came home.'

(21) の例が示すように、出来事の時間 $\tau(e)$ が t_{top} を含む、つまり t_{top} 以降も $\tau(e)$ が続く文脈で PERFECTIVE が使用された場合は意味的に矛盾すると判断される。

(21) [Context: Is your brother writing the letter?]

#wen, ?in-su:rat=na Ø.
 yes PFV.CV-write=3MINI.ERG 3MINI.ABS
 'Yes, he has finished it.'

PERFECTIVE が $\tau(e) \subseteq t_{top}$ を表現しているという想定は、以下の (22) の意味的な非整合性を説明する。(22) では、2つのアスペクトが同一の t_{top} ($=t_{uc}$) を共有する。ここで、この t_{top} を t_{topi} とすると、 $t_{topi} \subset \tau(e)$ かつ $\tau(e) \subseteq t_{topi}$ は矛盾するため、非整合的となると予測できる。

(22) #nag-traba:ho=?ak ket ?ag-trab~traba:ho paj la?eŋ.
 PFV:AV-work=1MINI.ABS then AV-IMPV~work still just

¹⁷ 最終音節の/u/は final lowering の適用対象となるはずだが、この語には適用されない。

(intended for) ‘I have been working (and I still am).’

なお (23) のように *?idi ?agiŋga:na ?ita* ‘until now’ と *pajla?ej* ‘now’ のような複数の時間副詞により個別の t_{top} を導入すると自然な表現になる。この時、一度ある時点で動作を完了した後、動作を再開したと解釈される。

(23) *nag-traba:ho=?ak* *?idi* *?agiŋga:na* *?ita*
 PFV:AV-work=1MINI.ABS then until now

ket *?ag-trab~traba:ho* *paj* *la?ej*.

then AV-IMPF~work still just

‘I have worked until now and am still working.’

ここまで見た例の時間的文脈は全て過去 ($t_{top} < t_{uc}$) か現在 ($t_{top} \subset t_{uc}$) であるため、PERFECTIVE は非未来時制を表しているようにも見える。しかし、(24) と (25) の例が示すように、この形式は未来 ($t_{uc} < t_{top}$) においても使用可能であるため、特定の t_{uc} と t_{top} の関係性に出現を制限されない¹⁸。(24) は、NEUTRAL (INFINITIVE) と共起し未来を指示するとされる接語が、PERFECTIVE と共起している点でも興味深い。

(24) *?inton bigat* *ti* *malem*,
 when tomorrow C afternoon

?in-pa-takder=mi=nto *dajtoj* *balaj*.

PFV.CV-CAUS-stand=1AUG.ERG=FUT PROX.C house

‘Tomorrow afternoon, we will have built this house.’

¹⁸ (24)–(25) の例を容認したのは2名の20代の話者であり、日常的な会話での使用も何度か確認している。一方、30代以上の話者2名は、未来の文脈ではPERFECTIVEではなくNEUTRALを使用するとコメントした。この話者たちのコメントは、PERFECTIVEが非未来の時間を指示することを示唆するように思える。しかし、30代以上の話者たちと20代の話者たちの時間表現の体系に根本的な差異を認めるということ自体にも何かしらの説明が必要である。むしろ、IMPERFECTIVEが時制に関わらないことを踏まえると (cf. 17–18), PERFECTIVEも未来の文脈そのものと非整合的なのではない (つまり非未来を表現するわけではない) と考える。現段階での仮説としては、容認しなかった話者にとって perfective が出来事の発生を含意するため (cf. Bohnemeyer 2009), 非現実である未来の文脈には非現実的な意味を表す NEUTRAL が使用されると推論する (NEUTRAL については後述)。この問題については、将来の課題としたい。

- (25) no p<in>altu:g-an=mi ti ?ugsa ton bigat ?i-jawid=mi
 when <PFV>shoot-LV=1AUG.ERG C deer when tomorrow CV-bring=1AUG.ERG
 ‘If we shoot down a deer tomorrow we will bring it home.’

これらのデータから、PERFECTIVE は t_{top} と t_{uc} の関係についてはいかなる限定も行わず、perfective($\tau(e) \subseteq t_{top}$) を表す純粋なアスペクト標識であると結論づける。

5.3 NEUTRAL

NEUTRAL は、先行研究では不定形 (infinitive) とも呼ばれ、明示的な屈折形態素を伴わない動詞形式である (Rubino1997). この形式は前接語 =(n)to と共起して未来時制を表すとされる。しかし実際は=(n)to は随意的であり、NEUTRAL 単独でも未来の時間を指示できる (26)–(27). (28) が例示する様に、過去の文脈で実現した出来事を表現するためにこの形式を使用すると非適格な表現となる。

- (26) Future-time reference

?ag-kasar=da(=nto) Ricky ken Lucy ?inton domingo.
 NEU.AV-marry=3AUG.ABS(=FUT) P and P when Sunday
 ‘Ricky and Lucy will get married next Sunday.’

- (27) Future-time reference

?ag-awi:d=ak(=to) ?iti mabi?it.
 NEU.AV-go.home=1MINI.ABS(=FUT) OBL short.time
 ‘I will go home for a short time.’

- (28) Past-time reference

*?<um>inom ?isu:da ?itaj.
 <NEU.AV>drink 3AUG.ABS while.ago
 (intended for) ‘They drank a while ago.’

ただし、NEUTRAL が使用される文脈は未来に限らない。この形式は論理的に非現実 (irrealis) である様々な文脈に出現する (29)–(32). (29) は命令, (30) は勧誘の言語内行為を表現しており、どちらでも NEUTRAL が使用される。

- (29) Imperative

?ag-eskwela=ka=n.
 NEU.AV-school=2MINI.ABS=already

‘Go to school now.’

(30) Cohortative

maŋ-an=tajo=n.

NEU.AV-eat=1/2AUG.ABS=already

‘Let’s eat!’

さらに、NEUTRAL は習慣 (habitual)／総称 (generic) の様相¹⁹を表現する場合にも使用される。

(31) Habitual/generic reference

a. l<um>nek taj ?init ?iti la:ʔod.

<NEU.AV>set C sun OBL west

‘The sun sets in the west.’

b. dinomiŋgo ŋa ma-pan ?ag-simba ni filip.

every.sunday LIG NEU.AV-go NEU.AV-church P.C P

‘Philip goes to the church every Sunday.’

また、frustrative を表現するときにも動詞述語は NEUTRAL で実現する (30)²⁰。ここでは *?itaj* ‘a short while ago’ により過去の時間が t_{top} として導入されているが、NEUTRAL が使用できる。従って、NEUTRAL は過去の文脈自体と非整合的なのではなく（つまり未来を指示するのではなく）、実現した出来事を表現できないと考えられる (cf. 28).

(32) Frustrative

perdj-en=da kuma ?iti balaj=da ?itaj

break-PV=3AUG.ERG INT OBL house=3AUG.GEN while.ago

¹⁹ 習慣／総称をアスペクトに含める向きもある。しかし、これらは現実での実現が問題とならず、アスペクトとは意味的に異なる。筆者はこれらを可能世界の量化が関わる様相の一種と考えるが、詳しい分析は今後の課題とする。

²⁰ frustrative は様相の 1 つであり、Tariana 語 (Arawak) では “it [the action] has failed already or is bound to fail; or that the success of an attempted action is not yet certain” を表すとされる (Aikhenvald 2003: 380)。一方、イロカノ語の frustrative 構文は、意図したものの実現できなかった行為を表す。

ɲem haan=na met na-perdi.
but NEG=3MINI.ERG also POT.PFV.PV-break

‘They tried to break their house a short while ago but failed to do.’

以上をまとめると、NEUTRAL は非現実を内包的意味として有する形式である。従って、当該形式自体が未来を表現しているわけではなく、その意味は文脈的な補強によるものと考えるのが妥当である。

5.4 PAST IMPERFECTIVE

4.1 で、IMPERFECTIVE は時制に関わらないことを明らかにした。そこで問題となるのが、IMPERFECTIVE が過去の文脈において使用できるのなら、PAST IMPERFECTIVE はどのような役割を持つのかという点である。この形式は、PERFECTIVE を形成する接辞と IMPERFECTIVE の形成に関わる (C)VC の重複により形成される。つまり、形式的には PERFECTIVE と IMPERFECTIVE どちらの特徴も有する。

PAST IMPERFECTIVE の使用が過去の文脈に制限されるのかを明らかにするデータは現段階では得られていない。しかし以下の例が示す様に、PAST IMPERFECTIVE は、動詞が表す出来事が複数回生じたことを表現するということがわかる。(33b) 及び (34b) の真理条件は、PERFECTIVE を含む対応する表現 (33a) と (34a) と、複数性という点を除き同様である。(33b) と (34b) は、それぞれ一度行ったということと一人の男性老人が亡くなったという意味では使用できない。

(33) a. PERFECTIVE

na-pan=ak ?iti balaj ni Florian.
PFV.AV-go=1MINI.ABS OBL house P.C P
‘I went to Florian’s house.’

b. PAST IMPERFECTIVE

nap~na-pan=ak ?iti balaj ni Florian.
PIMPF:AV-go=1MINI.ABS OBL house P.C P
‘I went to the Florian’s house many times.’

(34) a. PERFECTIVE

nataj ti lakaj
PFV.AV:die C old.man
‘The old man died.’

b. PAST IMPERFECTIVE

nat~nataj dagi:ti lal~lakaj
 PIMPF:AV:die PL.C PL~old.man
 ‘The old men died.’

また、この形式は長時間継続した動作を表現するときにも使用される。

(35) b<in>as~ba:sa-Ø=na ti “Noli me tangere”.
 PIMPF:read-PV=3MINI.ERG C Noli me tangere
 ‘S/he read “Noli me tangere” for a long time.’

なお、この形態変化は必須ではなく随意的である。(36) の例では、*na:min ?adu* ‘many times’ により動詞が描写する動作が複数回生じたことが表現されているが、動詞が PAST IMPERFECTIVE である必要はない。

(36) nag-ujek Ø ?iti na:min ?adu.
 PFV:AV-cough 3MINI.ABS OBL time many
 ‘S/he coughed many times.’

さらに、PAST IMPERFECTIVE は PERFECTIVE や IMPERFECTIVE と比較して生産性も限定的である。**natnatnag* (< *natnag* PFV.AV:fall); **bimbalbalassiw* (< *bimbalassiw* PFV.AV:cross) など、容認されないものが存在する。

まとめると、現段階で明らかになっていることは限定的だが、PAST IMPERFECTIVE は動作の複数性や継続性を表現するとき使用され、その他の意味については対応する PERFECTIVE を含む表現と同様の真理条件的意味を持つ。また、形態変化は随意的でありかつ生産性にも制限が見られたため、屈折ではなく派生であると結論づける。

5.5 まとめ：イロカノ語の文法範疇

イロカノ語の時間表現に関わる動詞屈折と意味の分布をまとめた表5をもう一度以下で示す。

PERFECTIVE と IMPERFECTIVE はそれぞれ *perfective aspect* と *imperfective aspect* を表現し、 $\tau(e)$ と t_{top} の関係性から規定されるアスペクトのドメインにおいて範列的な関係を形成する。従って、イロカノ語の文法範疇としてアスペクトを認定できる。

表5 時間指示に関わる屈折形態素と意味

Mood value	Irrealis	Neutral	
Aspectual value	Neutral	Perfective	Imperfective
Morpheme	∅	<i>-imm-, -in-, n-</i>	(C)VC-reduplication

一方 § 5.4 で、NEUTRAL が非現実の文脈において使用されるということを観察した。しかし、NEUTRAL を, irrealis mood を表現する文法範疇と認定するのはいくらか問題がある。先に見たように、IMPERFECTIVE 及び PERFECTIVE は論理的に非現実である文脈でも出現することが可能である (cf. 18, 24, 25)。つまり、論理的に非現実である全ての文脈において NEUTRAL が使用されなければならないということはなく、イロカノ語において概念的な現実／非現実が文法的に区別されているとは言い難い (cf. Bar-el and Denzer-King 2008)²¹。なお、Rubino (1997) の記述の通り、NEUTRAL は未来を指示する際に使用されることを観察した。しかし、この形式は過去の文脈においても生起するほか (cf. 32)、他のどの形式とも時制について範列的な関係を持たない。

PAST IMPERFECTIVE についても、時制の領域において他の形式と範列的關係がなく、また屈折というよりも派生形態論として扱うのが妥当と言えることを観察した。

これらを総合して、時制、アスペクト、ムードのうち、イロカノ語の文法において区別されるのは、アスペクトのみであると結論づける。

6 結語

本研究では、時間的概念がイロカノ語でどのように表現されるかを記述した。副詞的要素による時間表現は、形態的に副詞、従属接続詞、接語・不変化詞、前置詞、名詞、動詞に分類できる。機能的には、時間的位置 (time-positional) を表す要素、持続時間 (duration) を表す要素、頻度 (frequency) を表す要素、アスペクト的意味を表す要素の4つに分類できることを示した。

次にイロカノ語の動詞的範疇により、アスペクト、つまり t_{top} と $\tau(e)$ の関係

²¹ また、irrealis という意味的に抽象度の高い文法範疇を想定すること自体に問題があるという指摘がある (詳しくは Bybee (1998) などを参照のこと)。

性が文法的に区別され表現されることを示した。具体的には perfective aspect と imperfective aspect の区別が文法的に表現されることを確認した。さらに, PAST IMPERFECTIVE と呼ばれる形式は屈折ではなく派生形態法と考えるべきということを経験した。また時制やムードについては, それらを間接的に表現するのに使用される形式は存在するものの, そうした形式は範列的な集合を形成せず, 従って文法範疇とは認められないことを論じた。

略号一覧

ABS-absolutive, AUG-augmented, AV-actor voice, C-core argument marker, CAUS-causative, CV-conveyance voice, DIST-distal, ERG-ergative, FUT-future, GEN-genitive, IMPF-imperfective aspect, INT-intentional, LIG-ligature, LV-locative voice, MINI-minimal, NEG-negation, NEU-neutral, OBL-oblique, P-personal, PFV-perfective aspect, PIMPF-past imperfective, PL-plural, POT-ability; possibility, PROX-proximal, PV-patient voice, ST-state, 1-first person, 2-second person, 3-third person, 1/2-speaker&hearer

参照文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2003. *A grammar of Tariana, from northwest Amazonia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bar-el, Leora and Ryan Denzer-King. 2008. Irrealis in Blackfoot? *Santa Barbara Papers in Linguistics* 19, 3-14.
- Blust, Robert. 2013. *The Austronesian languages*. Revised edition. Canberra: Asia-Pacific Linguistics.
- Bohnenmeyer, Jürgen. 2009. Temporal anaphora in a tenseless language. In Wolfgang Klein and Ping Li (eds.), *The expression of time in language*, 83-128. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bohnenmeyer, Jürgen. 2014. Aspect vs. relative tense: the case reopened. *Natural Language and Linguistic Theory* 32: 917-954.
- Bybee, Joan. 1998. "Irrealis" as a grammatical category. *Anthropological Linguistics* 40:257-271.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Cover, Rebecca T. and Judith Tonhauser. 2015. Theories of meaning in the field: temporal and aspectual reference. In M. Ryan Bochnak and Lisa Matthewson (eds.), *Methodologies in semantic fieldwork*, 306–349. Oxford: Oxford University Press.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and aspect systems*. Oxford: Blackwell
- Haude, Katharina and Fernando Zúñiga. 2016. Inverse and symmetrical voice: on languages with two transitive constructions. *Linguistics* 54, 443-481.
- Himmelman, Nikolaus P. 2005. The Austronesian languages of Asia and Madagascar: typological characteristics. In Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 110–181. London: Routledge.
- Klein, Wolfgang. 1994. *Time in language*. London: Routledge.
- Klein, Wolfgang. 1995. A time-relational analysis of Russian aspect. *Language* 71, 669-695.
- Krifka, Manfred. 1998. The Origins of Telicity. In Susan Rothstein (ed.), *Events and Grammar*, 197–235, Kluwer, Dordrecht.
- Luraghi, Silvia. 2014. Gender and word formation: the PIE gender system in cross-linguistic perspective. In Sergio Neri and Roland Schuhmann (eds.), *Studies on the collective and feminine in Indo-European from a diachronic and typological perspective*, 199–231. Leiden; Boston: Brill.
- Maddieson, Ian. 1984. *Patterns of sounds*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matthewson, Lisa. 2004. On the methodology of semantic fieldwork. *International Journal of American Linguistics* 70: 369-415.
- Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York, NY: Free Press.
- Reid, Lawrence A. 1989. Arta, another Philippine Negrito language. *Oceanic Linguistics* 28(1), 47–74.
- Ross, Malcolm. 2002. The history and transitivity of western Austronesian voice and voice-marking. In Fay Wouk and Malcolm Ross (eds.), *The History and Typology of Western Austronesian Voice Systems*, 17-62. Canberra: The Australian National University.
- Rubino, Carl. 1997. A reference grammar of Ilocano. PhD dissertation, University of California, Santa Barbara.
- Rubino, Carl. 2005. Iloko. In Alexander Adelaar and Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 326–349. London and New York: Routledge.
- Smith, Carlota. 1997. *The Parameter of Aspect*, 2nd edition. Dordrecht: Kluwer.
- Thomas David D. 1955. Three Analyses of the Ilocano Pronoun System. *Word* 11, 204-208.

- Varzi, Achille. 2003. Mereology. In Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2016 Edition). <<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/mereology/>>. (accessed 14 February 2018)
- Yamamoto, Kyosuke. 2017. A phonological sketch of Ilocano. *Kyoto University Linguistic Research* 35, 21-49.

受理日 2018年4月2日